

大乘と部派仏教・仏伝文学

大乘仏教と密接に関連し、その源流とみなされるものの一つが仏塔信仰、それに部派仏教と仏伝文学であるという説を紹介しましたが、仏塔信仰についてはすでに述べました。

部派仏教（小乗）には、多くの部派があり根本分裂、始末分裂によって二十部ほどの派がありましたが、大乘仏教はこの部派に対抗して興隆してきたのにもかかわらず、教理の面でかなりの影響を受けているので、少なからず大乘仏教の母胎としての役割を果たしたのではないかということです。

龍樹菩薩の大智度論、唯識の教理、大品般若経などは有部（説一切有部）の教理が引用され、大乘仏教を信奉する人々が小乗仏教の教理にも通じていたことがわかり、また大乘仏教を信奉する以前に小乗仏教の学習をしていたことが考えられます。また、以前から主張されていることですが、大乘仏教は大衆部から発達したといわれています。これは、大乘仏教が盛んになってからも大衆部という一部派が存続をしていたことから、大衆部がそのまま大乘に移行したとは認められていないようですが、かなり近い教理を大衆部がもっていたということは広く承認されております。仏に対する見方、また菩薩観に大乘と共通点があり、さらに「心性本浄」心はもともと清いものであるというのは大乘の如来蔵説（仏性と同じようにすべての衆生は如来を胎、つまり子宮に宿しているということ）と同様であるといわれています。

仏伝というのは釈尊の生涯の伝記をさしますが、ご入滅当初にそういうものがあつたのではなく、しばらくして弟子達の記憶や逸話などから一定の型にはめられて伝承をされるようになったものです。南伝の經典のスッタニパータにその一部、律蔵のマハーバツガに成道から初期教団の成立までが説かれています。

大衆部系の説出世部が伝持していたマハーヴァスツ（大事）や法蔵部の仏本行集経、有部のラリタヴィスタラ（方広大莊嚴経）などは最初は諸部派共通の仏伝から編集さ

れたもので最初は律蔵の中に述べられていたのが増広されたと言われます。また、仏教詩人である馬鳴（サンスクリット原語 アシュバゴーシャ）は仏所行讚（同 ブツダチャリタ）を著し、マートゥリチェータは「一百五十讚」および「四百讚」を著して仏徳を称え、その作品は愛好され、口ずさまれたといわれます。これらの仏伝に説かれていることは、釈迦菩薩が燃灯仏（定光如来 ディーパ4kara）という仏から将来成仏する授記を与えられることで、それから六波羅蜜の修行をすることにより、必ず仏となることを約束されるわけです。この釈迦菩薩が燃灯仏より授記を受けたことは、大乘経典でもしばしば語られる所で、その関係がいかに関接であるかわかるのです。降兜率（釈尊のご降誕のために兜率天から降りてくる）、あるいは托胎（母の摩耶夫人の胎内に宿る）、出胎（誕生）、出家、降魔（修行を妨げ、悟るのを邪魔する悪魔を退治する）、成道（菩提樹のもとで悟りを開かれる）、転法輪（弟子達に説法する）、入滅（沙羅双樹のもとで涅槃に入る）などという八相成道の説も、起源は仏伝にありそれが広く大乘仏教一般に取り入れられたものであろうということです。

さらに、仏伝文学に類したものに、ジャータカ（本生経）とアヴァダーナ（譬喩）というものがあり、両者ともに内容は仏伝文学と似ています。ジャータカもアヴァダーナも仏教の聖典の分類をした十二部経の中の一つでアヴァダーナは教訓的な譬喩で、ジャータカは釈尊の前生譚ですが両者ともによく似ているのです。これらの説話文学も長い間かかって作られていったようで、沢山の作者達がいたはずですがその実体は不明です。しかし、大乘仏教運動と何らかの関係があったと仏教学者は述べています。

さて、以上、仏塔信仰、部派仏教、仏伝文学という様々な要素から大乘仏教運動が興隆したということを知りましたが、いずれにしても急に突発的にそれらが混じりあって大乘仏教が興ったのではなく、釈尊以来の伝統を引き継いだ在家の人々の信仰の流れが核となっていて、そこから逆に仏塔信仰や仏伝文学などが生まれ、これに賛同する部派仏教の出家の人々も順次巻き込まれて、教理的な基礎もできて大乘運動が興立したとも言えます。